

## エトロフからアムールへ

石川県 前川 武雄

昭和十九年の春、明治四十一年生まれの私にもとうとう召集令状が来た。金沢の連隊に入隊してみると、未教育の年配者ばかり。動作緩慢、耐久力最低でしほりにしほられた。

一期の教育を終えた七月、いよいよ北の守りの新戦力として出陣、海を渡って着いたところは千島列島、エトロフ島であった。

千島の冬は北国育ちの我々にも泣きたいほどの厳しさだったが、耐えに耐えて警備の任を果たし、終戦を迎えたときはうれしや、これで帰れるかと、一同笑いかみ殺すのであった。

二十年九月半ば、天寧港より乗船して室蘭に上陸すると発表され、猪俣隊全員歓声を挙げる。内地は食糧も極度に不足していると聞いていたので、一同土産物

の用意に大わらわ。私も、珍珠のタラバガニの燻製のほか、ようかん、缶詰類を雑のうに詰め、純毛の靴下三足は縫い合せて腹巻にして着込んだ。

持てるだけ持って豊浜から飛行場までの行軍で大汗をかいたが、集結地の天寧飛行場に到着して驚いたことは、先鋒の部隊の大切な持ち物が投げ出されて山をなしているではないか。不審の我々に指揮官が言ったことは、狭い船腹に大勢が無理して乗るのだ、一人一人身軽くせねば乗船を許可しない、というのである。

苦心の土産の大半を放棄した恨めしさは今に忘れられないが、乗船した三千トン級の貨物船が紺碧の単冠湾にすべり出たときは、兵隊は一樣に目頭を押さえていた。船は国後水道を北上し、一同に不審を抱かせたまま夜半、樺太の大海に着く。町は見渡す限り火の海で、あんな大火は見たことがなかった。棧橋で炊飯をしてまた乗船、南に進路を取ったので安心したのも束の間、今度は北へ北へと向かったので船倉は大混乱。切歯落胆の幾刻かを経て夜明け接岸したのは間宮海峡に臨んだソフガワニという小港であった。

約束が違うぞという憤りはいつしかどうにもなれと自棄になり、重たい足取りで三キロほど歩くと、森林を焼き払った跡に鉄道が敷かれ、数両の貨車をつないだ旧式な機関車が我々を待っていた。

まきをたいてノロノロと走ったから、それほど遠距離ではなかったろう。降りたところはサラワッカというところで、駅から四キロほどの森の中に收容所があった。室内にはペーチカが燃えており、二段ベットにわら布団が敷いてある。

ソーセージのような肉片の入ったかゆの夕食を済ますと、船と汽車との旅で疲れ切った一同は、早々に眠りについた。

レールの切れ端を叩く音で六時に起こされ、三班に分かれた作業が始まった。私どもは汽車の釜にたくまき集め、別の班は線路のかさ上げ工事であった。まき集めは倒れた松材を一メートルほどの長さに切り、太いものは割って、線路のわきに積むのであった。ノルマが段々上げられる一方、倒木もなくなると、二人引きの鋸をもって立木を切り倒さねばならなくなった。

十二月、一月の最寒期は零下四十度を超える日がたびたびあった。さすがのソ連側も作業を休ませてくれたが、こんな日に煙突から立ち昇る煙が真つ直ぐに天高く伸びてゆく様が実にきれいであった。また晩秋のころ、落葉松が黄色、紅葉になり、野から丘、山と見渡す限り染められてゆく様は見飽きぬ絶景であったが、初めてのシベリアの冬を越せなくて、次々と犠牲者が出たことは痛恨の極みであった。

飢餓にさいなまれた果て、異物を喫して変死する者、盗みを働いて半殺しにされる者……語るに忍びない地獄図絵を繰り広げて、前途ある有為な人々が原始林の土と化した。

しかしまた、温かい友情がどれだけ戦友の生命を助けたか、このことも書き落としてならないことだと思う。一番年長で弱兵だった私は、エトロフから一緒だった福島県出身の小松茂君の、乏しい中から分け与えてくれた、仏のような慈悲心を忘れ得ない。彼の友情を思うたびに涙が浮かんでくる。

二十一年五月ころに始まった故国へのはがき通信、

また六月ころから開かれた演芸会などが、どん底に落ちた私どもの氣力にガツンと活を入れてくれた。足首をくじいて一か月半の入院加療をした私は、再び活力を取り戻せたのも幸運であった。

その後何か所かの分所を転々としたが、二十二年の正月、結氷したアムール河を渡って、イズベストコーバヤの北方、テルマに移動した。余り大きくない収容所だったが、北は北海道から南は鹿児島までの出身者がいて、お国言葉でにぎやかなことであった。やせるだけやせていた私は軽作業に回されて便所掃除などに使われたが、黄色い太い氷柱が倒立したような糞便の氷塔を、鉄棒で碎いては捨ててに行く仕事は、何とも嫌なものであった。それにつけても、使用用のちり紙は、ただの一枚も支給されなかったが、ロシア人はどう始末しているのだろうか。

テルマでは道路工事に出され、一輪車の土砂運びをやったが、弱い私は三日でアゴを出し、炊事の雑役に回された。ソ連将校の住宅の掃除にも行ったが、世帯道具のほとんどないのに驚いた。今日にも転勤命令が

出ても、即刻出られる用意だと聞いたが、陽の当たるヨーロッパへ帰る日を渴望する彼らの氣持ちも察せられた。

テルマの小高い丘に真赤なツツジのような花が一面に咲き、小川の泥の中にドジョウに似た魚が動き回っていた。こんな寒いところにも生命が生きている、驚きであった。

短い夏が過ぎて九月、待望のダモイの日が来た。帰還の車中は夢うつつであった。

日本の看護婦さんが手を振ってくれる高砂丸に泣きながら乗り込む。船が静かに走り出したときの感激は、筆紙に語り尽くせない。

そのとき、私はふと、若いときに読んだデューマの『モンテクリスト伯』の末尾の言葉を思い出していた。

「この世の中には不幸も幸福もなく、ただあるものは或る状態と或る状態の比較だけである」ということです。極度の不運に際会した者のみが、至上の幸福を最もよく感じることができのです。生きるのがいかによいかを知るためには、死を欲するような辛い目に

違わなければならないのです。

## 異国の丘シベリア抑留

東京都 島崎 武男

昭和二十年九月二十日、我々はソ連邦の満州国侵入による戦いに敗れて、無念の涙をのみハルピンにおいてソ連兵に武装を渡した。その後ソ連兵の銃に囲まれながら荒野の死の行軍を強いられ、海林より貨車に乗せられ、逃亡を恐れるソ連側に日本に帰すと徹頭徹尾だまされ続け、シベリア鉄道でイズベストコーバヤまで送られた。ここからさらに北へ白銀の荒野を十五日間疲労こんぱいの極の中、同年十二月二日にシベリアのテルマに着いた。私はさらにこの奥地のモシカに送られた。苦難の年の暮れ、虜囚の第一日がこれから始まる。

消耗し切った体には極寒の地の暖炉のまきを拾いに行くのがやっとだった。ここで食わされたのはかつて

関東軍の馬の飼料だった皮かぶりのコウリヤン、カチに乾燥したトウモロコシ、どんなに煮ても柔らかくならなかった。しかもほんの一握りの量であった。

それでも何日か日を経過するにつれて体力は回復してきた。そして燃料運搬、家屋修理と作業を与えられた。それは伐採、搬出、製材と次第に重労働となり、しかもノルマを与えられるようになった。シューバーを着ての伐採、搬出、製材の作業は非常に重労働だった。この地域の冬の平均温度は零下五十度だった。そんな中で伐採、搬出、製材の作業にほとんどの者が従事させられた。そしてそれぞれに「ノルマ」を課せられた。

戦友の中には重い防寒外套を着ての伐採作業に機械に動けず、倒れる大木を避けきれずに下敷きになって死んだ者もいた。山からの馬力搬出で転落し命を失った人もいた。製材所で作業中製材機の上の振動する材木を足で押さえた一瞬に右足首から回転する丸鋸で失ってしまった人がいた。こんな重労働の中で干からびたトウモロコシや皮かぶりのコウリヤンでは弱りきつ